日大湘南キャンパスに存在する地域資源を活用した環境教育計画の作成と評価

磯邊涼平（Ryohei ISOBE）　矢澤良輔(Ryosuke YAZAWA)　市原聡(Satoshi ICHIHARA)

1. はじめに,背景

1.1 環境教育とは

現在、地球温暖化や自然破壊など環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然環境を守り、私たちの子孫まで自然環境を引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく、持続可能な社会を構築することが大切である。そのために国民が様々な機会を通して環境問題について学習し、自主的、積極的に環境保全活動について取り組んでいくことが重要であり、特に、21 世紀を担う子どもたちへの環境教育は極めて重要な意義を有している。

1.2 環境教育の目的

環境や環境問題に対して関心・知識を持ち、日常生活と環境との関わりについて、総合的な理解と認識を通して、環境の保全に配慮した望ましい働きかけの出来る技能や思考力、判断力を身につけ、持続可能な社会の構築を目指して、よりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境への責任ある行動を取ることが出来る態度を育成することを目的としている。

2. 本研究の目的

現在、初等教育で行われている環境教育では地球温暖化やオゾン層破壊などの環境問題への認識や自然環境への興味関心を持たせるだけでなく、実際に自然環境の中で学ぶことで主体性、道徳性を養うことも目的としている。

そこで本研究では日本大学が持つ学内キャンパスの自然を活用し近隣の小学生へ環境教育を実践することで、環境への興味関心を寄せ、より主体性、道徳性が養うことのできる環境教育プログラムを作成し、実際に実施し、その評価をすることを目的とする。

2.1　谷戸探検のねらい

四季の変化を通して谷戸の変化を五感を使って感じ取り、自然に対する価値観や自ら関わろうとする主体性を育む。自分たちが生活している近隣の自然環境の現状を知り、自然環境を守るという道徳性を養う。

2.2　稲作体験のねらい

田んぼに住む生き物や植物など身近な自然に触れ日本の伝統文化を感じることで、国土の保全などのための森林資源の働きおよび自然災害の防止への意識向上をねらいとし、稲作に対しての理解度を高めることを目標とする。

2.3　小物作りのねらい

谷戸探検を通じて自然の中で拾った物で小物を作成することで、身近な自然と大切さを知ること、また間伐材を土台として使用するため間伐についての知識をつけることをねらいとする。

3. 実験内容と評価方法

3.1　谷戸探検の実験内容、評価方法